

女子美

No.149/2004



- 2P 特別講演 関根伸大氏「環境と美術家」
- 6P コミュニティ・コミュニケーション銀座 2004
- 8P JFA フェアデザインコンテスト2004
- 9P 就職だより
- 10P 女子美アートミュージアム展覧会情報
- 11P シリーズ歴史資料紹介◎
ヒーリングアートプロジェクト報告
- 12P スウェーデン・ハスケバーナ バイクンク受賞
デザインフォーラム「04 TDC DAY」開催
平成15年度 女子美美術奨励賞

Topics ● ① 特別講演

関根伸夫氏 「環境と美術家」

彫刻家であり、環境美術のパイオニアとして知られる関根伸夫氏の講演が、去る6月4日、本学短期大学部 別科現代造形研究室の主催で開催されました。関根氏の学生時代の交流から、「モノ派」誕生のきっかけとなった作品や国際デビューのエピソード、さらに都市や環境と美術の関わり

りについてなど、多くの作品のスライドを交えながら貴重なお話を伺いました。

講演はLANを通じて相模原校舎にも中継され、また講演会後には関根氏との懇談の場が設けられ、多くの女子美生が作品制作の姿勢を学ぶ機会を得ました。



学生時代の出会い

関根：僕は今、環境美術研究所というものをやっています。環境をテーマに制作しています。そのスライドをお見せする前に、僕が美術を始めた時の話から入ろうと思います。

学生の頃は多摩美大の油絵科で絵ばかり描いていたんですが、3年生のとき、日本の現代美術に抽象絵画をもたらした斉藤義重さんが担任になったんです。僕は以前から斉藤さんを尊敬していたので嬉しくなりまして、金魚のフンみたいにくっついて(笑)、様々なことを教わりました。斉藤さんはよく、受験用のデッサンなど美術の基礎訓練を経るうちに、一番大事な発想力というもの枯渇するんじゃないか、「基礎を一度忘れて、今やりたいことからやれ」と僕らに言っていました。例えば、具体的な形態を描くためならばトレースや、今ではCGといった方法もあると思います。絵を描くという前段で疲れずに、今、興味のあることを優先しないと、なかなか自分の世界を展開できない、という意味でした。

僕が高校生の頃、50～60年代にかけては、アンフォルメルという運動が世界的な風潮で、定まった形態が描かれていない平面作品が席捲していました。斉藤さんは

日本でこのアンフォルメルの先鞭をつけた人です。60年代になると美術シーンはアメリカへ移り、アンフォルメルの流れからポロックのアクション・ペインティングが生まれ、カラー・フィールド・ペインティングへ、大学の頃にはウォーホルらのポップ・アートが立ちはだかっていました。そんな動きの中、斉藤さんの下で、現代美術のなかに世界的に変化していく共通テーマがあることを感じ取りました。みなさん自由に作品を作っているわけですが、時代ごとにそれまでの価値観を越えようとする共通テーマが必ずあるわけです。それは科学や数学、哲学や映画などあらゆる分野とも同時で、この共通テーマを意識しながら、美術ではどうしていくのかを考えると、やみくもに絵を描くのではない、一定の方向性や進路が見え、世界共通の場に立てるようになっていくわけです。

そんななかで僕は、空間に対する新しい解釈、認識というものに非常に興味を持ったんです。当時、日本で高松次郎さんが活躍していました。新宿に店内を真っ白くペンキで塗った「カッサドーロ」というバーがあったんですが、高松さんはそこに色々な人を立たせ、影だけを拾って描いたんです。そのバーに行くと、人がいなくても影があるから人の気配がする。彼はそれを「不在の部屋」と呼びました。その後「遠近法」というシリーズで椅子やテーブルを極端なパースペクティブで作り、日常空間の中に遠近法で縮まった奇妙な空間を作り出した。この高松さんがヴェネチア・ビエンナーレに出展する際にアシスタントを募集し、僕はいち早く手を挙げました。良い兄貴分で、アトリエでの交流がまた、僕の頭脳訓練となったんです。

「位相」シリーズの誕生

関根：その頃、僕は位相幾何学というものに凝っていて、その最初の作品が68年の「位相」です。ペニヤを曲げた半立体で前からは円筒、横からはグニャグニャに見えますが、これを現代美術展のコンクールで平面部門に出したところ、係の人が立体部門に入れてしまった。そこで受賞してしまったので以来、彫刻家になっています(笑)。

そして、直後に須磨離宮公園で行われた現代彫刻展に招待されたのですが、彫刻は一度も作ったことがなく、途方にくれたまま時間が経つばかり。係の人に「先生、いつ作品を取りに行きますか？」と聞かれ、とっさに「私は現場でやるからいいです」と答えたものの、彫刻の技術はない、卒業したてでお金もない、これはもう考えるしかない。そして、位相のテーマから次のように考えました——「地球に1点、穴を開けたらどうなるか」。

数学や科学のように頭の中だけでの思考実験だから、マグマがあることなんて考えない。それで地球に穴を開けて、そこから土をどんどんかい出し、穴を掘って積んでいく。いつのまにか地球は空になって、ゴムまりみたいに皮だけが残る。それをつまみ出すと穴を中心にクルッとひっくり返る。すると、地球の裏返しみたいな世界が感じられるんじゃないか——。



O CAT(大阪シティエアターミナル)(大阪市浪速区)
「フライング・レインボー」1995
ステンレス

当時、体力と仲間だけはたくさんありましたから、お酒やおむすびで皆をつつて（笑）穴を掘り、出た土をどんどん固めていきました。それが今日ポスターになっている「位相——大地」です。現場は公園ですから、展覧会後は穴を戻してもらいました。だからあの作品は写真しか残ってなくて、誰も見るできない。それで、安心して傑作といえるんですね（笑）。

ヴェネチア・ビエンナーレから世界へ

関根：その後、ヴェネチア・ビエンナーレ日本館の出展作家として荒川修作氏とともに選ばれ、ステンレス柱に石を乗せた「空相」を発表しました。鏡面に仕上げたステンレスに風景が映り込み、上の石が浮いているように見えるので、マグリットの絵から着想したのかと聞かれたこともありますが、思いついたのは植木屋さんのアルバイトからです（笑）。三又とって木を三脚式に組んでジャッキで庭石を動かすんですが、静止していた重い石がフッと地上を離れたとき、たった10センチ動いただけで、石が生き物になったような驚きがあったんです。

だから「空相」は、石が空中に吊り上げられてから柱に乗るプロセスが一番、面白い。そのセッティングをビエンナーレのオープニングにぶつけました。関係者は危険だからと止めましたが、最も面白いところをオープニングで見せなければ意味がない、と言って強行したわけです。ヴェニスには運河の町だから、トラックが走る道がない。ヘリポートをチャーターしてトラックや石、クレーン車を乗せて会場に入ると騒音がすごいので、何だ、何だと人が集まりました。そこで演出で、皆の頭上のなるべく低い位置で、16トンの石をぐるりと回転させたんです。そして、ステンレスに乗った石に梯子をかけて上り、クレーンのフックを僕が外した瞬間、観客が大歓声で祝ってくれました。このシーンが「ヴェネチア・ビエンナーレ始まる」というニュースのトップで放送されて、いきなりプロの作家になっちゃったんです（笑）。画廊からのオフアームもいくつかあって、ヨーロッパで2年くらい生活することになりました。



ヴェネチア・ビエンナーレ出品作(ヴェネチア・ビエンナーレ公園、イタリア)「空相」1970 大理石、ステンレス H450×420×130cm

欧州で感じた、芸術家と街づくり

関根：個展で作品が売れると画廊からお金をもらい、旅行もしながら3カ国に滞在しましたが、特にイタリアで感じ入ったのが、アーティストと街との関係です。

ローマやフィレンツェでは昔の、特にルネサンス期のアーティストが街中に色々作っていますね。例えばミケランジェロのピエタはローマ教会の大聖堂の中であって、これを皆が観に行く。彼は広場も設計している。アーティストが街づくり、環境作りを手伝っていて、自身の一番良い作品を街に残している。過去の芸術家の仕事が観光資源となっていて、その土台を作ったのはアーティストであることを、住む人々は身をもって知っている。だからイタリアでは、アーティストがなかなか大切にされるんですね。

ミラノのサン・ジョバンニという芸術家村にも滞在しました。家賃の代わりに年に2、3点、作品をオーナーにあげれば良いという条件で、12棟あるアパートメントの半地下をすべてアーティストに貸していました。隣のアーティストは作品との交換

で、立派な家具を手に入れて来たり、スーパーに行けば売り子のおばさんに、私が気に入ったらあなたの彫刻と店の物を交換しよう、と言われてたり。作品を買うなどと大それたことではなく、作品と物を交換してくれば、アーティストは食べていける。世界中からサン・ジョバンニに集まった12人の作家は、そうして作品を糧に生活していた。これはすごいな、と思いました。オーナーは「このなかのひとりでも著名になれば、作品の価値は何千倍にもなるから私はラッキーなんだ」と言っていました。日本との体温差をずいぶん感じましたね。

そうして個展をしながら移動するうち、画廊に入るサイズの作品に限界を感じてきた。そんな時にルネサンスの作家の仕事から、環境美術という考えが浮かんだんです。野外や建築物のインテリアなど、パブリックの場に作品を作り、それがそのまま環境を形成する装置なり、街の面白みになればいいな、と。環境作りには建築、造園、都市計画など色々ありますが、面白み、楽しみの領域が欠けているのではないかと、それは、アーティストのやれる範囲ではないかと思ったんです。



東京都庁舎シティホール(東京都新宿区)
「空の台座」1991
黒御影石
H450×360×180cm

環境美術の仕事を通じて

関根: 今まで国内外400ヶ所くらいで制作してきましたが、環境美術では人間と物体の間に起こる関係が非常に面白いんです。

「風景の指輪」(日大生産工学部習志野校)などでは広重、北斎の絵にもあるフレーム効果を使いました。宮島の鳥居や茶室の円窓など、フレーム自身にはたいした機能がなくても、フレームを置くことで、私たちの目には風景が凜とした姿に見えてくる。モノとの関係で私たちの見え方が変わるんですね。また、ある環境のなかで過去の意識と我々の意識の普遍性を感じることもあります。群馬県の安中榛名で手がけた住宅開発地の広場では、丘の向こうに妙義山が見え、冬至の時は山と山の間に落日するんです。ここには野村遺跡という縄文遺跡があり、太古の人も、冬至になると山間に夕日が落ちることを知っていたわけですね。これをめがけて園路を作りました。

環境のなかで作品を置くとまた、人々が自由に交流してくれます。塩釜総合体育館では、前庭にいくつかのオブジェとともに「長寿の門」というものを配しました。松島にふたつ向き合った岩があり、この間を船で渡ると長生きするという言葉えをモチーフ

にしたんですが、この彫刻の間を最近、近所のお年寄りがくぐっているそうです。作品を置いた地元で色々和尾ひれがついて、僕らがいなくなる頃には良いストーリーがくっついていけば楽しいですね。公園にしても、野原だけのところに列石を置けば、子どもはうまく遊びます。一定の遊び方はないけれど、遊びを誘う遊具、想像を誘う仕組みが環境と美術の関係では大事だと思います。

放浪時代、ローマの遊歩道にグロテスクな怪獣の像が置かれていました。あんぐり開いた怪獣の口が水飲みになっていて、その口の中に金髪の男の子がもぐりこんで水を飲んでいる——なかなかきれいなシーンでした。その時、ずっと美術をやるならばこういうことをやりたいな、環境美術というカテゴリーがあるんじゃないか、と思ったんです。日本に帰国すると同時に建築家や造園家とコンタクトをとり、だんだんとこの仕事に入ってから、もう30年が経ったんですね。

2004年6月4日 於：杉並校舎4401教室
企画・運営：別科 現代造形研究室



新潟駅南口駅前広場—シンボルゾーン
「水の神殿」1982
草水石(白御影石)
H580×1395×2210cm



釜山ビエンナーレ 彫刻プロジェクト(韓国釜山市)
「天と地の対話」2002
黒御影石、スチール、噴水施設
φ25m、H800cm



釜山ビエンナーレ 彫刻プロジェクト(韓国釜山市)
「天と地の対話」2002
黒御影石、スチール、噴水施設
φ25m、H800cm

<プロフィール>

関根 伸夫 (せきね のぶお)

1942年、埼玉県生まれ。

1968年、多摩美術大学大学院油絵研究科卒業。同年、神戸須磨離宮公園現代日本野外彫刻展で、〈位相—大地〉を発表、モノ派誕生のきっかけとなる。1970年ヴェネチア・ビエンナーレで〈空相〉を発表、以後ヨーロッパで制作活動を行う。

1973年、環境美術研究所設立。現在に至るまでパブリック・スペースを中心にランドスケープ、モニュメントを制作。近年の展覧会は2003年に川崎市立美術館、東京画廊等で個展、グループ展は2004年 A Secret of History of Clay 展(テイト美術館リヴァプール)、2002年韓国釜山ビエンナーレ等。作品は各国の美術館に収蔵。

～関根伸夫氏の講演を聴いて～

🐿講演会の冒頭で、「空間を感じる。芸術、絵画とは空間表現である。」という内容のお話があり、とても興味深く聴くことができた。私は平面絵画にとくに興味があり、今まで立体造形と絵画とは別のもの、という感じを持っていたが、その先入観が払拭されることになった。

現代造形実習の授業で裸婦平面制作の油彩で、背景と人物との関係、空間の表現不足が課題だと感じていたこと、今週からは立体制作に導入したこともあり、とても良いタイミングで講演会から吸収できるものが多くあり、有意義な時間だった。

講演会ポスターにもなっている「位相一大地」68' は制作エピソードが楽しく、現在実物は存在せず写真のみとのことだが、この写真に存在する影、奥の掘り出した土柱の影、手前の穴におちる画面の外に立っている二人の人物の影がこの画面に残す効果など、影の構成がとても興味深かった。懇親会で直接先生に質問してみるとやはり写真家の方が人物を意図的に配置し、影を構成したこと、掘った穴は土柱と同じ形にしてすっぽり型抜きしたように作っていることなどを聞くことができとても楽しくなった。

その他作品スライドの中で特に印象的だったのは、大きな石をステンレス柱の上に置くとステンレス柱に空が映って見え、空と一体化させることにより石が地面から浮いて見える、というもの。広島を墓地を公園にしたところにある記念塔で、春分の日、秋分の日（彼岸）に天上のプリズムが塔のゲート中央に光の虹を映し出すという仕掛けのもの。公園に置かれた、子供自身の自由な発想で遊ぶことのできる石の遊具。どの作品からも制作した関根先生自身が楽しみながら造り出したということが伝わってくる。私も、楽しく制作する時間を過ごしていきたいと思う。

(別科 現代造形専修 吉岡 聖美)

🐿講演の中で関根氏は「空間とは数学的、数理的、幾何学的と色々捉えることができるが、私は芸術的に捉えたいと思った。空間に対する新しい解釈を探し求めた。」とおっしゃっていました。私は、まさしくその通りだなと感じました。今ある建築物が全て、機能重視でしかなかったら、それはとても寂しい社会だと思います。機能と見た目の美しさの2つが備わっているものこそ、人々の心に残る建築物となるのではないかと考えました。また、フレーム効果という言葉も強く残りました。「何か物体があることによって、その

周りの空間が活かされる。」この言葉の私なりの勝手な解釈ですが、例えば、緑が一面に広がっている草原があり、もちろんそれでも人々の心に感動は与えますが、そこにその草原のシンボルとなる門や柱を創ると、そこに目が行き、人々はそのシンボルと共に、草原の美しさに感動するという具合です。とても素敵なお話だと感じました。

また、「遊びを誘う遊具」というのも素敵だと思いました。私の公園のイメージは、やはりブランコやシーソー、ジャングルジムなどがあるような、遊び方が固定されているものです。しかし、スライドで見せていただいた公園は、石がごつごつとでっばっていたり、沿路が自然の迷路のようになっていたりと、シンプルで子供の発想力を最大限に引き出してくれる素晴らしい公園でした。大人の私でも、ぜひ一度訪れてみたいと思いました。

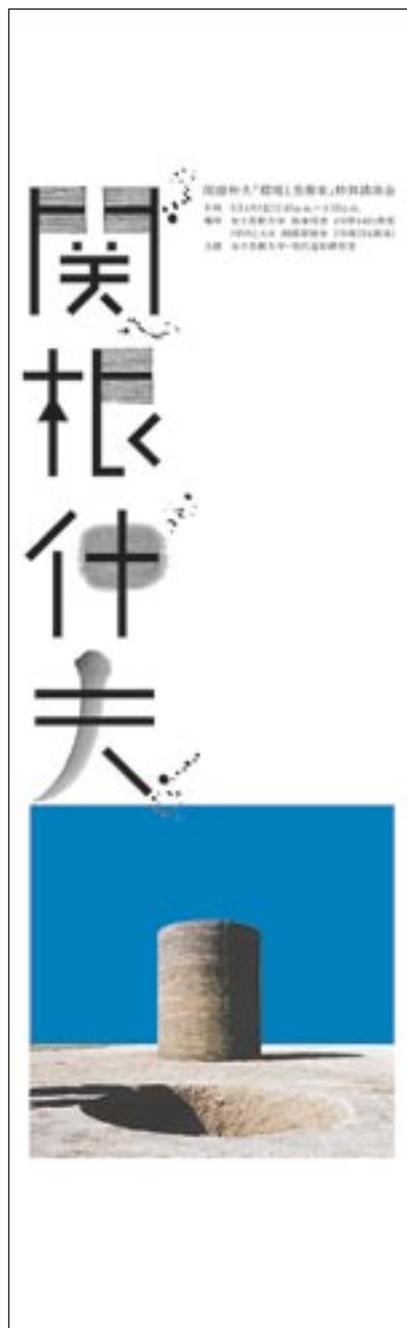
最後にパーティーで関根氏と少しお話させていただきましたが、講演をされていた時のイメージと違い、気さくで私たちの質問にも丁寧に答えてくださり、嬉しく思いました。

(別科 現代造形専修 内田 玲奈)

🐿「先生の作品は石で構成されているものが殆どだなあ」というのが率直な私の感想だった。どの作品からも小宇宙的なエネルギーが放出されている。シンプルな形で力があって、私の体全体に強く浸透してくる感じ。しかしそれは決して重過ぎることはなく、温かみ、強さに秘められた優しさ、癒しの力が備わっている。癒しというとなんだか今の流行の言葉でありきたりな感じがしてしまうが、そうでない。懐かしいようで未知のものと言うのが良いだろう。

「なぜ石を使うのですか？」と質問をした。すると先生は石自体がすごい力を持っているからだよとおっしゃった。先生の仕事は強い力を、適確な配置によって私たちにさせることなのだろう。つまり、私たちがその力を感じたり吸収したりすることを促しているのだろう。広大な自然の美に触れることと同じくらいの感動を覚えたが、むしろそれよりも凝縮された力が私を引き寄せたようだった。自然の力を構成で魅せるということは、シンプルであるがとても奥深い気がする。そんな先生の云わんとしていることを私も理解できるようにしたい。それが分からずとも、先生の仕事はとても魅力であり、沢山見たいと思うのだが、表現の自由と果てしなさを感じ、私の世界が広がる思いであった。

(別科 現代造形専修 杉田有希)



(ポスターデザイン/浅葉克巳氏)



関根伸夫氏特別講演の
ポスター制作に携って

別科 現代造形専修
及川 玲奈 講師

学内講演会のポスターデザインを、著名なアートディレクターである浅葉克巳氏が引き受けて下さったと研究室から聞いたときには正直言って驚きましたが、そのポスター制作に携わるといふ貴重な機会に接することができ本当に良かったと思います。出力したポスターを浅葉氏に見て頂いたときのことなのですが、幅1500mm×高さ5000mmというかなり大型のポスターを学内で出力できるということに関して、とても感心していました。そのとき、女子美は恵まれた環境なのだ改めて実感しました。具体的な制作のやり取りは下記のとおりです。

1. 浅葉氏と研究室の先生方による打ち合わせ
2. デザインデータを(株)浅葉克巳デザイン室から受取り
3. 関根氏からお借りした作品のポジフィルムをプロラボでデータ化
4. 浅葉氏指定の用紙を株式会社ピーシーエム竹尾で発注
5. 研究室にあるPower Mac G5でデザインデータとポジフィルムデータを合成し、ヒューレットパッカー社製の大型プリンターで出力

Event ● ● ● コミュニティ・コミュニケーション銀座 2004



5月1日、銀座並木通り5丁目～8丁目の街灯にとりどりのフラッグがはためき「コミュニティ・コミュニケーション銀座2004」は始まりました。

女子美術大学と銀座西並木通り商店会の共催で、眞田岳彦氏（ファッション造形学科助教授）が総合プロデュースしたこのプロジェクトは、芸術文化の集積地である銀座でアートを通して人と人の出会いの場を演出し、新たなコミュニティを形成しようとする試みです。2週間に亘り、展覧会やトークショー、パフォーマンスなど様々な内容で展開されました。

付属を含む女子美生、アーティスト、イラストレーター、銀座地域の商店、企業の人々、地元の小学生などがそれぞれに思う

銀座を描き、布にプリントアウトしました。それを図柄としたプレファブコートは、衣服であり、フラッグになり、またつなぎ合わせてあらゆる形体を創り出すものです。これが人と街を繋ぐ新しいメディアとなって銀座を訪れた多くの人々と共にコミュニケーションの意義を改めて考える機会になりました。このプロジェクトには準備期間、開催期間を含め、多くの学生が参加し一緒に創り上げて来ました。お互いに刺激しあい、協力しあい、企業や地域の人達とともに苦勞し、ともに感動した日々からは多くのものが得られ、今までにない貴重な生きた体験の場になったことと思います。

(開催期間／2004年5月1日(土)～16日(日)
会場／銀座西並木通りおよび周辺地域)

●プレファブ・コート展

1. オープン・アート・ギャラリー

(5/1～16)

女子美生、女子美付属生、アーティスト、イラストレーター、銀座並木通り会、協賛企業、泰明小学校生徒などがそれぞれに思う銀座を描いた236枚のプレファブコートが街灯に掲げられました。5月の風にフラッグとなってたなびき、銀座西並木通りがそのままギャラリーになりました。街灯の柱には作者とコンセプトも紹介され、立ち止まって一枚一枚、熱心に読んでいる人も大勢見受けられました。



2. チェック・プレイス

(バーバリー銀座9階ホール 5/1～16)

プレファブ・コートを自由に繋げ、「人、歴史、民族などあらゆる物が交叉し世界を構成する」というコンセプトに基いたインスタレーションが展開されました。そこにはプレファブ・コートで覆われ、音と光と映像が合体した独特の空間が創り出されました。会場には、作品紹介、制作過程や作業風景をまとめた映像も流され、期間中訪れた多くの方々がこのユニークな展覧会を楽しんでくれたことと思います。

3. クリコミ展

(サロン・ド・ブランタン 5/2～16)

現在、活躍中の21人のイラストレーターの参加を得て、「銀座」を描いた作品展がブランタン銀座のギャラリーで開催されました。会場には5月3日に行われたトークショーの様子も放映されました。

●トークショー

1. クリエーターズ・トーク

(eggギャラリー 5/3)

アートディレクター廣村正彰氏、イラストレーターの作田えつ子氏（女子美卒）、唐仁原教久氏、舟橋全二氏、藤枝リュージ氏を迎え、企画者の眞田岳彦氏とともに、個々の作品紹介を交えながら、クリエイターの果たす役割やこれから必要とされるコミュニケーションの在り方などについて語り合いました。会場も巻き込み、終始、楽しく和やかに進行しました。



2. コミュニケーション・トーク

(アップルストア銀座 3Fシアター 5/15)

柏木博氏（美術評論家）、石渡健文氏（ブルータス編集長）をゲストに迎え、眞田岳彦氏とともに、デザイン、メディア、美術など多様な視点から、このイベントのテーマ「コミュニケーション」を語り合いました。会場は定員の2倍もの方々が詰めかけ、予定時間もオーバーしましたが、最後まで内容の濃いトークに魅せられました。また、アップルストア銀座の1階ショップにもこのトークショーがライブで流されました。



●パフォーマンス&ワークショップ

(資生堂レストラン・ロオジェ前 5/2~9)

資生堂本社に並ぶ一角に特設されたコミコミステージでは、連休中に銀座を訪れた人々を巻き込み、女子美生による様々なパフォーマンスが行われました。付属高校、中学校の生徒達もスタンプラリーや絵本創りなどに大勢参加しました。またこどもの日や母の日に合わせたメディアチームのワークショップも、このステージを拠点にして、周辺の通りで展開されました。

1. ポートレイト・ペイント

(5/3、5、8)

女子美生（漫研、児美研、付属生など）が銀座の来訪者の似顔絵を描きました。一枚の画用紙をはさんで「描く人」と「描かれる人」の間に、気持ちが行き来し、コミュニケーションが生まれます。期間中、列が出来るほど大勢の方々が並び、学生達が描く自分の顔に喜んだり照れたり…。会場にはプリンターを設置し、デジカメで撮影した本人と似顔絵をその場でプリントアウトしましたがこれも好評でした。



2. フェイス・ペインティング

(5/2、4)

資生堂 SABFA のメイクアップアーティストの協力のもと、メイクをして貰った学生達が思い思いにプレファブ・コートを纏い、銀座に飛び出しました。個性がきらめき、街行く人々の目を引きました。延べ100人を越す学生生徒が参加しました。



3. ライブ・パフォーマンス

(5/9)

マンドリンクラブ、音楽部（他大学の応援も含む）によるライブパフォーマンスがにぎやかに行われました。あいにく、小雨模様でしたが、ステージから流れる歌声や演奏に道行く多くの方々が足を止め、一緒に口ずさみ、暖かい拍手を送ってくれました。

(コミュニティ・コミュニケーション銀座2004運営委員 見城美子)



●参加学生・生徒の感想

初めての会話～私の出会ったコミュニケーション～「こんにちは」「初めまして」「ありがとう」すべての言葉が私には特別。

私はこのイベントに参加するにあたり、コミュニケーションとはいつ、どこで、どんなふうに行うことができるものなのかと悩みました。実際街を歩き銀座に来ている人々に声をかけコミュニケーションを伝える、これは簡単なことではありませんでした。このイベントで目指したものは、私たちの手を離れて繋がっていくコミュニケーションです。幸い、期間中に『こどもの

日』、『母の日』が重なったこともあり、『感謝』をテーマの一つに、親から子へ、子から母へ、母から母へ…その無限に広がる輪のキッカケになることを目標としました。どこでも何においても可能だからこそコミュニケーションは素晴らしい。イベントを終えた今、大学で学ぶ以外の活動にとっても充実感を感じています。コミュニケーションとはお互いが出会うキッカケなのだと思います。私はこのイベントを通じ、数多くの人に出会い、支えられました。実際に手で触れ、見、聴き、他のものと関わる、それ

がいかに大切でかけがえのない時間であるかを知りました。今まで出会った人々、これから会うべき人々と互いに、残るコミュニケーションをとり、小さなキッカケでも自身が生むことができたらよいと考えます。一步一步。「想い」は前者から後者へ、そして未来に出会うあなたへと無限に繋ぎ合わされてゆく。これが私の出会ったコミュニケーションのカタチです。

(芸術学部 メディアアート学科3年

林 奈緒美)

🐼このコミコミ銀座に、私はデータスタッフとして参加させていただきました。集まった作品をパソコンに入れ、出力する作業です。「簡単そう」という気軽な動機でした。ところがその思惑はまんまと外れ、昨年10月から5月当日まで、忙しい日が続くことになりました。集まった100、200という作品をパソコンに入れ、サイズを変え、色を調整し…試行錯誤を繰り返しながら、1枚20分かかかる出力作業。初めて扱うMacと、細かい指定に悪戦苦闘の日々。遠い相模原キャンパスまでの道程も、月に何度か行くうちに慣れてしまうほどでした。物事の裏では、目に見えない数多くの人が働き、多方面の仕事をしています。へこたれそうになった事もありましたが、1歩ずつ完成へ近づく道程に、いつの間にかのめり込んでいました。コミコミスタッフとして多くの人と関わったことで、物作りの大変さと楽しさを、改めて実感することが出来ました。当初とは予想外のスタッフ活動でしたが、自分にとってとても価値のある半年だったと思います。(短期大学部 造形学科 美術コース2年 郡司 聡美)

🐼コミュニティー・コミュニケーション銀座の開催から1ヶ月がたちました。その“コミコミ銀座”に私も付属生スタッフとして参加しました。当日の私の役目はウォークラリーのスタンプ係でした。プレファブコートを着てフラッグの下に立って人を待つのは、自分が考えた企画です。なんとウキウキした気分でした。通りすがりの知らないおじさんに少々過激な言葉で「個性的」と言われ、少しショックでしたが、それでこそ女子美生。個性的一喜ばしいことではないかと思いました。そう考えれば最高のほめ言葉です！このイベントに参加する機会をくれた人と一緒に参加したみんなへ、ありがとう！(付属中学3年 田中 蘭)

🐼画廊やショーウィンドー。今まで「見る」だけだった銀座、並木通り。その街頭を私たちの手で街頭のフラッグやイベントで彩りました。街頭に下がっている色とりどりのフラッグ！有名なデザイナーや大学教授の作品にまざって、足元までおしゃれな銀座をイメージした、はたため私のフラッグ

を道行く人が足を止めて見て下さり、自分も銀座の仲間入りをしたようで嬉しい気持ちになりました。付属生で企画したイベントでは、私たちがデザインしたフラッグを目印にしたスタンプラリー、似顔絵に参加していただいた方や街を通る方にハート型に切った紙に幸せや希望などを書いていただいたりしました。そしてハート型の紙を四つ葉のクローバーのように貼り付け、一冊の本にしました。流行の発信地・銀座でのイベントの企画や実行、様々な人の目につくフラッグの制作など、授業では学ぶことのできないこの貴重な経験をこれからの自分の制作活動の中に活かしたいです。(付属高校3年 京戸 絢子)



NEWS ● ① JFAファーデザインコンテスト2004にて優秀賞受賞

去る4月21日、ファッションコンクール/JFA ファーデザインコンテスト2004が開催され、ファッション造形学科4年の牧野知佳さんが、デザイン・制作という過程を経て、優秀賞を受賞しました。以下は本人の報告です。

このコンクールは、柔軟な発想によって毛皮という手のつけにくい高級素材の可能性を発掘し、新発想を製品に取り入れて一般市場への流通を促すこと、加えて次世代のデザイナーの育成と支援といったことを目的としています。今年度は、2744点のデザイン画の応募があり、その中から30点が選出され、さらに審査員の厳選により、優秀賞、最優秀賞が決定されました。優秀賞、最優秀賞には、デンマークにある毛皮研究機関の、サガ・インターナショナルデザインセンターでの研修旅行が副賞として与えられ、8月15日～21日という日程で出発します。

今年度のコンクールのテーマは、「こだわ

り」。私の「こだわり」の概念とは、何事においても変化することを恐れることなく、試行錯誤を繰り返して物事を追求すること。又、その過程で生まれる様々な断片的な欠片の積み重ねを土台として完成への道のりをたどるというものです。それを表現するためには、素材の扱い方がとても重要となりました。毛皮は、職人さんの手により、私たちの足の部分だけを細かく継ぎはがれたものを使用し、はぎあわされていたパーツをそのはぎ目にそってランダムに切り抜き、表と裏を入り交じらせました。その他に、シーチング・ガーゼ・綿テープを紅茶染めし、ほつれた状態で様々に組み合わせ、デザイン線に挟み込みました。以上のような、毛皮と異素材の融合など、素材の表現の工夫が評価されて受賞に結びつきました。本優秀賞は、学校の先生方や友人、そして協力会社の皆様方の支えの中で生まれた受賞でした。皆様の支援には、本当に言葉では言い表せない程感謝の気持ちで一杯です。

(報告：ファッション造形学科4年 牧野 知佳)



Topics ● 就職だより ～学生支援センターから～

就職決定率、芸術学部で90%に

平成15年度は芸術学部が就職決定率90%の台に乗るなど、若干の景気回復をバネに大健闘しました。美大で決定率90%を超えるというのは、驚異的な数字で学生のがんばりがうかがえます。特に洋画専攻では長期化する就職採用活動にもめげず、デザイン科の92%（環境計画）を抜き97%と高い決定率を残し、根気強く準備を行ない継続して活動すれば必ず内定を獲得できることを証明した結果となりました。

現在学生の就職活動を取り巻く環境は、マスクミなどでも取り上げられている通り「早期化」「長期化」「厳選採用」そのもので、内定を獲得することは容易なことではありません。特にデザイン力などを活かした専門職では、他大の新卒者ばかりでなく、キャリアを積んだ中途採用者とも競合しなくてはならず、十分時間をかけ自己分析をしたり、作品のプレゼンテーション準備など授業以外にも多大な時間を費やさなくてはなりません。近年では、就職意識の高まりから学生が早期化に対応した準備を進めており、人気企業への採用も増え、本学で育てた実力で広く社会に貢献しています。

今年度は大学で立体アート学科、メディアアート学科、ファッション造形学科の3学科がはじめての卒業生を社会に送り出します。試行錯誤しながらチャレンジしている学生を、大学全体でフォローしていける体制づくりを行っていきたく思います。

平成15年度卒業生進路状況

大学・短期大学部別就職・進学状況

(平成16年5月20日現在)

	院・学部・科	修了・卒業生数	就職希望者数	就職者数	進学者数	求人者数
大 学	大 学 院	39	11	11	3	1,302
	芸術学部	432	191	171	66	
	計	471	202	182	69	
短期大学部	専 攻 科	43	16	15	12	1,302
	造形学科	305	73	45	148	
	計	345	89	71	160	

平成15年度卒業生就職状況

業種別就職状況

【大学 芸術学部】

1位	広告・デザイン	19%
2位	玩具・文具	15%
3位	皮革・貴金属	9%
	建築・不動産	9%
	印刷・出版	9%

【短期大学部】

1位	服飾	24%
2位	その他	15%
3位	建築・不動産	11%

主な就職先

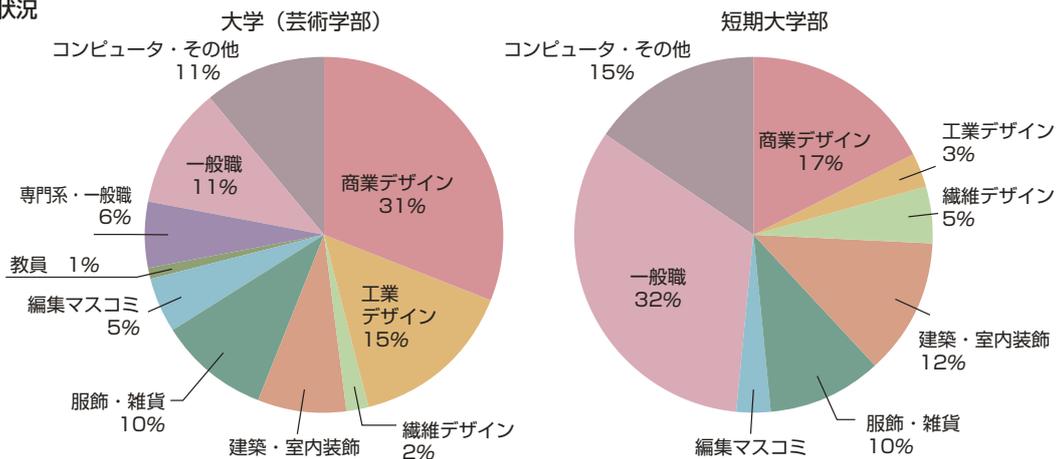
●大学 芸術学部

アートバーグ、ヴァンドームヤマダ、エポック社、オンワード樺山、キャンノン、近畿日本ツーリスト、クインバック、クサカベ、クリエイティブヨーコ、コーポレートデザイン研究所、こどもの館、コナミ、米屋、サン・アロー、サンエックス、サンスター文具、サン宝石、三和、スパイス、西武百貨店、大成建設、太平洋印刷、ツツミ、テクモ、ナムコ、西川産業、日本旅行、白鳳、バンダイ、ヒロモリ、ぶらんず・まいんど、ヘラルド・エンタープライズ、丸井、三越、ムーンバット、モランボン、ランドマック、ロジスティックス

●短期大学部 造形学科

キリンビール、シルビア、ナルミヤインターナショナル、上越印刷工業、サンエックス、キャンドウ、ワコール、サンレジャー、恵雅堂出版、伴印刷、ブライダルバンクコミュニケーション、日建企画、フランドル、ワールドストアパートナーズ、東京芸無、ワールド、ブルーグラス、朝日カルチャー、パークレイ、国興事務所、アール建築計画一級建築士事務所、45rpmスタジオ、ネクスト・コーポレーション、津田工芸、有便堂、セスナー

職種別就職状況



職種案内

商業デザイン
グラフィックデザイナー
パッケージデザイナー
キャラクターデザイナー
CGデザイナー
コピーライター
イラストレーター
販促・広告宣伝、販下、他

工業デザイン
インダストリアルデザイナー
木製品デザイナー
商品開発
玩具デザイン、他

繊維デザイン
テキスタイルデザイナー
刺繍デザイナー
染織、他

建築・室内装飾
建築製図
スペースデザイナー
インテリアデザイナー
インテリアコーディネーター
ディスプレイデザイナー
エクステリアデザイナー、他

服飾・雑貨
ファッションデザイナー
パタンナー
縫製
靴、靴デザイナー
ジュエリーデザイナー、他

編集・マスコミ
編集
レイアウト
校正
ディレクター
アナウンサー、他

教 職
教師
講師
助手

専門系一般職
ファッションアドバイザー
ショールームアドバイザー
専門性の必要な一般職、他

一般職
一般事務
営業
販売、他

コンピュータ・その他
システムエンジニア
プログラマー
インストラクター
スタイリスト
学芸員、他

J A M ● 女子美アートミュージアム 展覧会情報

展覧会開催報告

< JAM > 「生誕100年記念・没後20年 岡田謙三展」

第二次世界大戦後のニューヨークで活躍し、世界的評価を得た洋画家、岡田謙三の生誕100年を記念する展覧会で、JAMとしては初めて他の美術館との巡回展に参加する形で開催しました。平成15年7月の横浜美術館を皮切りに、秋田市立千秋美術館、神戸市立小磯記念美術館と巡回し、女子美アートミュージアムで最終回を迎えました。

本展は、横浜美術館、秋田市立千秋美術館、社団法人北里研究所をはじめとする国内所蔵品を中心に、アメリカの美術館から

日本初公開となる作品も加えた100点余の作品によりその画業を回顧するものでした。若い時にパリに留学、帰国後は二科会を中心に活躍するが、1950年アメリカに渡り、抽象的表現に日本の感性を加えた独自の画風を確立し評価を得る、という岡田の制作の変遷を会場の作品によってたどることができる、興味深い展覧会でした。JAMでは、出来る限り多くの作品をご覧いただくために、会期中に展示替えをし、多くの来館者が岡田の色彩世界に魅了されました。(2004年5月12日-6月27日)



< ガレリア ニケ > 「美の仕事 女たちのランウエイ」

女子美術大学同窓会主催のこの展覧会は、「世界を美しく変えていくクリエイターたち その仕事と活躍の軌跡を追う」というテーマで、女子美を卒業し、新しい時代の美の担い手として高い評価を受けているクリエイターたちの作品とメッセージを展示しました。紹介された卒業生は、岸本若子(テキスタイル・ファッションデザイナー)、小池葉子(㈱NHKアート 総合デザイン美術プロデューサー)、国方コックラムみどり(製本作家)、齋藤智美(TIFFANY & CO. JAPAN INC ディスプレイ担当)、陣内昭子(㈱エソティ資生堂 ク

リエイティブディレクター)、山本千絵子(㈱資生堂宣伝部デザイナー)、出川涼子(コスチュームデザイナー)、松原澄子(㈱ミキモト ジュエリーデザイナー)の8人です。社会の第一線で、個性と能力を發揮し活躍している先輩の作品に身近に接した学生や付属の生徒たちには、自分の将来を思い描く、よい機会になったことでしょう。卒業生を紹介するこのような展覧会を今後も企画したいと考えています。(2004年5月17日-29日)



展覧会案内

< JAM > 「女子美付属・相模原市内中高生作品展 あっ、アート」

昨年の「アートってなあに？」につづく展覧会です。今回は、女子美中高に加え、相模原市の12中学と6高校が参加します。新しい試みとして、観客賞を設けます。昨

年好評だったワークショップも2回予定しています。表現者の卵たちの若く瑞々しい作品に出会える展覧会として、回を重ね発展させていきたいと考えています。

会期：2004年7月30日(金)～8月29日(日)
会場：女子美アートミュージアム
主催：女子美術大学
女子美アートミュージアム

< JAM > 「作家からの贈りもの」展

この秋、JAMでは、ピカソをはじめ、藤田嗣治、香月泰男、猪熊弦一郎、有元利夫、若林奮、舟越桂という7名のアーティストがつくった『作家からの贈りもの』を紹介します。アトリエに転がっていた木の切れ端や素材のかけらたち、その素朴な存在が作家たちの手によって、大切な人への

想いをこめた素敵なプレゼントとして生まれ変わりました。この企画は、JAMからすべての人々にささげる展覧会の「贈りもの」です。会期中に、舟越桂氏と有元容子氏の講演会や、学生参加のワークショップを予定しています。

会期：2004年9月8日(水)～10月18日(月)
会場：女子美アートミュージアム
主催：女子美術大学
女子美アートミュージアム

Series ● ● ● —シリーズ歴史資料紹介⑧— 廖承志の書「桃李滿天下」

今回紹介するのは廖承志の書「桃李滿天下」である。この書は母・何香凝の母校、女子美術大学の創立八十周年を記念して贈られたものである。「桃李」とは古来有徳の人士を譬えて用いられる語であり、ここでは女子美の卒業生を指す。「桃や李が天下に満ちているように、華やかで徳のある女子美の卒業生たちが世界の隅々まで活躍している」というほどの意味である。晩年の筆だが、若々しく力感のある書風である。

廖承志の父は国民党の指導者・廖仲愷、母は上述したように女子美出身の画家で中華人民共和国を代表する婦人運動家・政治家の何香凝である。新中国成立後、全国民主青年連合会主席などを歴任し、周恩来指揮下の「日本組」責任者として、孫平化、王曉雲、蕭向前らの日本専門家を率いて、「廖承志・高碕達之助連絡事務所」を開設、1962年11月には、国交がなかった日中間に、周恩来と松村謙三との間で約束された「LT貿易」（廖承志・高碕達之助の覚書に基づく貿易）に道を開いた。LT貿易はその後、双方の政界人士の相互訪問と政府間の意思疎通の役割を果たすなど、両国の国交正常化実現の基礎を築いた。文革で



廖承志「桃李滿天下」

一時批判されたこともあったが、間もなく表舞台に立ち、中日友好協会会長として再び対日外交に当たった。日中国交正常化交渉では周恩来総理を支え、国交回復が実現した翌73年4月、訪日団団長として来日、その後、全人代常務副委員長に就任した。まさに中日友好を体現する人物であった。

昨2003年4月から6月まで、中国・深



絵画合作中の何香凝・廖承志母子

圳市にある何香凝美術館で「翰墨情深——何香凝、廖承志母子合作絵画作品陳列」と題する展覧会が開催された。何香凝と廖承志は1930年代からたびたび絵画の合作を試み、少なくない作品が残されている。政治家としての素質ばかりでなく、女子美で学んだ何香凝の芸術的才能もまた、この息子に受け継がれていたといえよう。

(女子美術大学歴史資料整備委員 島村輝)

NEWS ● ● ● —ヒーリングアートプロジェクト報告—

北里研究所メディカルセンター病院 新館産科病棟

昨年の秋に北里研究所メディカルセンター病院から、平成16年5月に北館（新館）5階の産科病棟のオープンに当たり5階フロア全体に関わるアートコーディネイトをしてほしいとの依頼があり、プロジェクトを進めてきました。壁面には木製パネルにアクリル絵具彩色による絵画の設置、病室入口等のドア、柱、面会室の下がり壁にはデジタルプリントグラフィックス（ラッピングバスや屋外広告、公共空間のフロアに貼ったデザインシートなどに見られるプリント専用粘着シート）によるアート制作をおこなうことになりました。

絵画については1,030mm×2,184mmサイズ3点、728mm×1,030mmサイズ3点の計6点を制作、デジタルプリントグラフィックスは、面会室壁面、柱、倉庫ドア表面、個室ドア表面など15箇所に施工することになりました。

5階フロアのテーマカラーが「ライトグリーン」であり、また北里研究所メディカルセンター病院で毎年開催している絵画展でのアンケート調査も参考にして、「樹木、植物」を作品テーマに制作を進めていくことに致しました。

今回、学部学生、短期大学部学生合わせて16名が、ボランティアで参加して制作に当たりました。絵画作品は、2～3名のグループで共同制作を行い、アイデアスケッチを重ねた後、イラストボードに手描きによる縮小原画制作、本制作（パネルにアクリル絵具彩色）という流れで進めました。またデジタルプリントも同時期に原画制作、スキャナーでCGに取り込んでのデジタルデータ化を進め、試作と色校正を重ね、4月16日に業者による施工が終わりしました。絵画も4月22日設置され、ここにプロジェクトが無事終了致しました。

(芸術学部 メディアアート学科教授 山野雅之)



学生による壁画作成風景



住友スリーエム㈱による施工風景



壁面設置風景

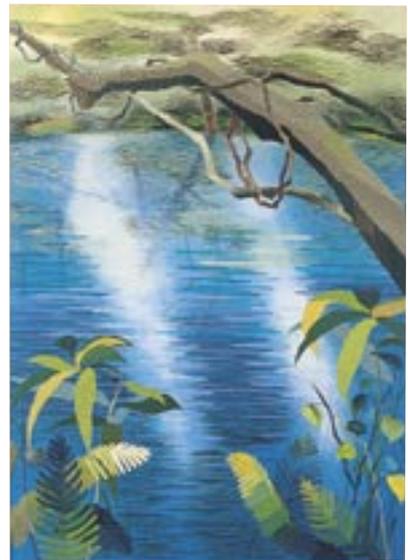
NEWS ● ③ スウェーデン・ハスクバーナ バイキング賞受賞

スウェーデンのハスクバーナ社は300年以上の伝統をもつ製造メーカーです。1689年に国立工場として創立し、現在はチェーンソーから幅広い家庭用機器を製造しています。1872年よりミシンの製造を始め1979年にはハスクバーナ社として初のコンピュータミシンを開発し、世界の刺繍作家やマシーンキルト作家に愛用されています。ハスクバーナ バイキング賞は、2001年からバイキング ソーイング マシナズ ジャパン社より、授業にハスクバーナミシンを使用している本学短期大学部 造形学科デザインコース クラフトデザイン系と専攻科の刺繍の学生を対象として設けられた賞で、卒業・修了制作において最優秀作品を制作し、将来専門分野での

活躍が期待される学生に授与されています。2003年度の受賞者は短期大学部造形学科デザインコースクラフトデザイン系刺繍を今年3月に卒業した小林麗音さんでした。

作品について

昨夏に訪れた白神山地の十二湖で、青池の深い青色に出会い、この青色を表現したいと心に決めたのが作品制作のきっかけでした。絹布を染料と顔料で染め、絹糸・木綿糸等で刺繍しました。湖上にさしかかる枝は、力強いタッチの表現に適している組織を用い、青池の刺繍糸は、薄い絹布を裂いて紐状にして刺繍し、青池の魅力が感じられるように工夫しました。(小林麗音)



深青 1165×820mm
素材：絹布・絹糸・綿糸

NEWS ● ④ デザインフォーラム「04 TDC DAY」開催

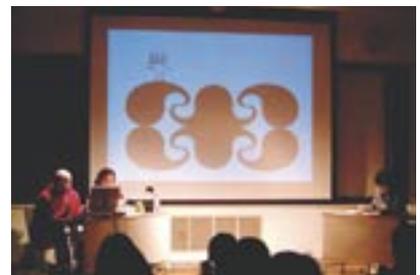
4月3～4日の二日間、東京タイポディレクターズクラブ主催による「04 TDC DAY」が杉並キャンパス4401教室女子美オーデトリウムで行われました。これは今年4回目を迎える国際デザインフォーラムで、国際デザインコンペティション「04 TDC 賞」から6組7名の受賞者を招き、さらにゲストスピーカーを迎え、質の高い6つのトークセッションが開催されました。スピーカーは Sagi Haviv (Chermayeff

& Geismar Inc.) < NY >、Guang Yu < 北京 >、北川一成、青木克憲、佐藤卓、深澤直人、Amit Pitaru < NY >、中村勇吾、武藤努、立花ハジメ、M/M (Paris) < パリ >。

【東京タイポディレクターズクラブ】

1987年12月17日に設立されたデザイナー団体。日本で唯一のグラフィックデザインメジャー国際コンペティション TDC 賞を毎年実施。広く文字の視覚表現の優秀さや新しい試みに焦点をあて、商用に使

用されたデザインだけでなく、実験的な作品も同様に評価することから現役学生の受賞者も出している。



NEWS ● ⑤ 平成15年度 女子美美術奨励賞

創立100周年記念事業の一環として、「100周年記念大村文子基金」は、大村智名誉理事長夫妻からの寄付を基に、平成11年に設立されました。この基金の褒章事業のひとつに付属高校・中学校生を対象とした女子美美術奨励賞があり、例年高校生は卒業制作展における作品の最優秀者、中学生は卒業学年の美術科目首席者が受賞者となっています。平成15年度は写真の2名に決定しました。長谷川さんは現在芸術学部絵画学科洋画専攻に、三善さんは現

在付属高校に進学しています。今後の活躍が多いに期待されます。



長谷川 海さん



三善 千愛さん



広報課では女子美のニュースを募集しています。お気軽に下記までお知らせ下さい。
《広報課》 TEL. 03-5340-4513
FAX. 03-5340-4523
[E-mail] prs@joshibi.ac.jp

表紙写真：コミュニティ・コミュニケーション2004(チェック・プレイス)

URL <http://www.joshibi.ac.jp>

発行 学校法人 女子美術大学
〒166-8538 東京都杉並区和田 1-49-8
企画・編集 企画部 広報課
監修 山田 愛子
発行日 平成16年7月29日